

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	循環病態科学・胸部心臓血管外科学 川村知紀
指導教授氏名	皆川 正仁
論文審査担当者	主 査 花田裕之 副 査 富田泰史 副 査 高橋識志
<p>(論文題目) Outcomes of total arch repair using frozen elephant trunk for type 1 aortic dissection: retrospective study (急性大動脈解離DeBakey 1 型症例に対するフローゼンエレファントトランク法を用いた全弓部置換術の治療成績：後方視的検討)</p>	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>本研究では、1989 年～2016 年までの 27 年間に筑波メディカルセンター病院と弘前大学医学部附属病院で行われた 117 例の DeBakey 1 型大動脈解離手術症例について、後方視的に検討がなされた。従来の全弓部置換術症例(TAR) 75 例と、TAR に加えて人工血管置換部末梢から下行大動脈にかけてステントグラフト挿入を追加するフローゼンエレファントトランク法を用いた全弓部置換術症例(FET)42 例の 2 群に分けて検討がなされた。両群間の患者背景については高血圧、緊急手術例、下肢虚血について FET 群で有意に多く認められたが、年齢、性別、腎機能、下肢以外の臓器虚血、糖尿病、腹部大動脈瘤、マルファン症候群に有意差を認めなかった。また手術関連因子である、手術時間、人工心肺時間、心停止時間、ICU 滞在日数などに 2 群間の差は認められず、追加手技としての総頸動脈再建と腋窩-大腿動脈バイパスは FET 群で有意に多く行われた。TAR 群と FET 群において永続的脳障害発症率(5.3% vs 9.5%)、一時的脳障害発症率(4.0% vs 2.4%)に有意差は認められなかった。30 日死亡率は 6.7% vs. 0% (P=0.158)、病院内死亡率は 10.7% vs. 0% (P=0.049)であった。遠隔成績では FET 群の生存率が良好であった(Log rank P=0.034)。大動脈イベントの発生率においては両群間に差を認めなかった(Log rank P=0.737)。院内死亡に関わる危険因子は年齢 (P=0.046)、術前からの維持透析症例(P=0.003)、頸動脈の還流障害(P=0.032)、縦隔炎の発症 (P=0.017)であった。</p> <p>要約すると FET 症例では TAR 単独に比べて予後に影響が大きい脳障害については一過性、永続性ともに差を認めなかったものの、明らかに生命予後に改善が認められた。この改善は FET が血管吻合部における止血をより確実とすることが生命予後を改善する背景の一因と推察された。これらの所見は貴重な新知見であり、学位授与に値する。</p>	
公表雑誌等名	Hirosaki Medical Journal 2020; 71: 21-30.